

建設・総合技術監理部門

所属 アイサワ工業(株)名古屋支店

國枝重一

よみがえ

甦らせたい水辺

1. はじめに

我が国では、昭和30年代半ばから急速な開発が進み半世紀を経ました。当方は45年以降、行政の現場でダムや河川改修等の担当を預かり、計画・調査から施設管理まで幅広く経験しました。こんな立場の中で、自然保全やミティゲーションの実施に関わりつつ、地域の開発整備と自然の変遷を当事者として見てきました。

今、宅地化、工場が立地した自分の住む地域の環境を見渡して、あまりの変化に驚くとともに、地域の水辺について、一部だけでも昔(50年前)の原風景へ回復できないものか、本当は子どもたちへ渡すべき財産ではなかったかとの思いを強くしています。還暦を過ぎたいま、もの忘れとは裏腹に昔の記憶だけは鮮明に残っていますので、記憶を整理し、思いを付して述べます。

2. 記憶の中の原風景

私の生まれ育ちは大垣市南部の農村(当時)地帯です。



写真1 地元町内の航空写真

1947年米軍撮影 黒い線に見えるのは堀(池)

..... 右上が我が集落 上辺(北)に小学校



写真2 堀に囲まれた屋敷(町内)

河合孝氏「輪中」より

昭和30年代前半までは、堀(池)と田んぼが交互に織り成す全くの低平水田地帯でした。農道は一部しかなく、田植えや刈り入れはもっぱら舟を利用していました。その様子は、小学校の校歌“学びの窓から一望千里、美田は父祖の築いた幸よ、、、”また、中学校歌では

[岐阜県技術士会会報の情報連絡先]

代表幹事 田島 暎久 〒509-0108 各務原市テクノプラザ1-1 テクノプラザ内
TEL: 0583-79-0580 FAX: 0583-85-4316 Email: gcea9901@ybb.ne.jp

“まこも繁る岸に、遙か道は延びて、豊かに萌え立つ緑の命よ、、、”と歌いましたように原風景そのままでした。(写真 1、2 参照)

3. 当時(昭和30年代)の水辺環境

写真1のように、おびただしい数の堀(池)は、夏は水田灌漑のため、水深は2m程度と深く、非灌漑期では1~1.5mと浅くなる。また、それぞれ池ごとに、水環境が微妙に異なっており、魚の種類や水辺、水中の植物も違っていました。特に屋敷周りの池は、各家庭の掘抜き井戸(自噴水)からの地下水が流入しており、夏でも池の水温が低くて川底がよく見えるほど透明度は高い。冬は水温が外気より高くて、寒い朝は、もうもうと水蒸気が立っていたものです。

こんな自然環境の中で、春から秋は魚釣り、冬は網で魚捕りと、大人も子どもも遊びと生活の主要部分でした。特に私は、周囲から漁師になるのかと言われたほど魚捕りが好きで、どの魚がどの池で捕りやすいかは大体分かってました。いまでも航空写真を広げて、地元の先輩(お年寄り)と当時の談義に花を咲かせています。記憶にある動植物を思いつくままあげます。

魚類.....ふな、こい、なまず、うなぎ、ライギョ、さより(くるめさより)、

せんぱら(いたせんぱら)、もろこ、どんこ、どじょう、、、

甲殻類.....かに(もくずがに)、ザリガニ(アメリカザリガニ)、すじえび

貝類.....どびん(からすがい)、つぼ(たにし、かわにな)、しじみ

植物 水辺.....まこも、よし、ふとい

水面.....ひし、浮き藻(あかうきくさ、さんしょも)、ホテイアオイ

水中..... きんぎょ藻(ふさも、オオカナダモ)、こうほね(水路)

昆虫...げんごろう、あめんぼ、みずすまし、たがめ、いととんぼ、おはぐるとんぼ

動物...とのさまがえる、へび、いたち、うよめ(かいつぶり)

どこにでも生息していましたが、今では絶滅危惧種になっている種もあります。

4. 土地改良事業で堀や池は美田へ

大垣南部では、昭和35年~40年の間に土地改良が進められ、無数にあった堀約150ha近くはすべて埋め立てられ、風景と水辺環境は一変しました。当時、名神高速道路が地内を東西に通じ、インターチェンジの設置が決定してましたので、その代替農地確保として大規模に実施されたようです。埋め立てで広い農地が変わり、各農家では耕作農地が倍増し大きな恩恵を受けました。

他方では、堀の埋め立てと、水路がコンクリート壁や柵渠となり、動植物の生育できる環境はほぼ消滅することになりました。

[岐阜県技術士会会報の情報連絡先]

代表幹事 田島 暎久 〒509-0108 各務原市テクノプラザ1-1 テクノプラザ内
TEL: 0583-79-0580 FAX: 0583-85-4316 Email: gcea9901@ybb.ne.jp

幸いにも低平地のため、水は地区内幹線排水路を通して水門川、牧田川、揖斐川へと途切れることなくつながっており、また、田んぼの水路は用排水兼用で夏の灌漑期には水路いっぱいにあるため、めだかやふな、こい類の小魚は今でも水路内には多くいます。現状水質は数 PPM 以下と思われ、これからも下水道普及や浄化槽処理により安定すると思われ。したがって、めだか、ふなの生息環境は保てるでしょう。

問題は、水路と田面がコンクリート壁や柵板で完全に遮断されたことです。このため、魚は行き来できず、特に、かえるは土手から一旦水路内に落ち込むと、再び這い上がることができず、短い期間でほぼ絶滅してしまっただけです。今ではカエルといえば、イボガエル（ツチガエル）とアマガエルだけになっています。何とか改善したいものです。

5. 甦らせたい水辺

この水路のコンクリート化の利点は、草刈りや土羽の補修が不要となり、水路清掃も容易になったことです。欠点は、生物の移動が遮断され、水辺のマコモ、ヨシなどからなる生息環境が消滅したことです。



写真-3 現状の農業用排水路
(コンクリート柵板)



写真-4 自然な土羽水路 (安八町内)

= = >



写真-5 地元町内の排水路



写真-6 杭瀬川スポーツ公園の良好な水辺

甦らせたい目標は、30年代の環境に戻そうとは思いませんが、水田・水路の一部だけでも、当時の環境へ近づけたいものです。県内ではモデル的に進められていますし、水田魚道が篤志企業で開発され普及が進められていますので地元でも考えたいと思います。

何はともあれ、西南濃地域の大きな河川では、水辺環境改善が進められて良い状態にあり、これからは、川と水田を効果的につなぐとともに、地区内でスポット的にも動植物

[岐阜県技術士会会報の情報連絡先]

代表幹事 田島 暎久 〒509-0108 各務原市テクノプラザ1-1 テクノプラザ内
TEL : 0583-79-0580 FAX : 0583-85-4316 E-mail : gcea9901@ybb.ne.jp

に触れ合える場を復活させたいものです。写真-3～6は現状とめざしたい目標です。

6. 自前のビオトープ



写真-7 夏の状況



写真-8 冬の状況

以前から興味がありましたので、自宅脇の休耕水田の一角に小さな池を作って観察しています。写真-7,8のとおりですが、池は2箇所合わせて20㎡ほどです。8年前に自分で掘った池ですが、ヨシ、マコモが生えて、魚は子ブナ、メダカ、ドジョウ。真っ赤なザリガニは処置に困るほど増える年があります。池に手を加えることは、ほとんどなしですが、初夏に灌漑水が入ると魚がたくさん発生し、秋に水が落ちて浅くなると魚も一緒に流され、一部だけがとり残され冬を越します。(その大半は、アオサギに食べられてしましますが、、、)

時々、池の水を採って、倍率50倍程度の携帯型スコープで覗いてみますが、季節の藻類やミジンコが見えて生態のダイナミック感が味わえます。仕事柄がでて、子供から笑われますが、、、

7. 子供は「生き物に大きな興味」を実感

今、4歳になる孫がいます。この正月は寒かったですが遊びに来るなり「爺っちゃん、魚捕ろっ、、、」、タモ(網)を持って前の池へ引っ張りだされました。私の役目は、孫が池にはまり込まないように、子どもの後ろからジャンパーの裾を引っ張っていること。孫はタモで泥をいっぱいすくいあげ、網の中の泥を水中に戻してばしゃばしゃと洗い出す。つい半年前までは、たも網の使い方も分からず、ただ水中に放り込むだけで、とても魚を捕るような扱いはできなかったのですが、いつのまにか覚えたようです。繰り返すうちに運良く、めだか、どじょう、子ザリガニが網の中からでてきました。「いた、いた」ためらいもせずに摘み上げてバケツへ移したのには驚きました。

子供にとって小さな池での体験ですが、生き物の感触を体で感じて自然や環境に興味を

[岐阜県技術士会会報の情報連絡先]

代表幹事 田島 暎久 〒509-0108 各務原市テクノプラザ1-1 テクノプラザ内
TEL: 0583-79-0580 FAX: 0583-85-4316 Email: gcea9901@ybb.ne.jp

もつきっかけの場になると確信しました。

8 . おわりに

昨年各地で発生した震災や水害の復旧工事が、河川や水路・農地で始まりますが、ぜひとも、水辺の動植物が生きやすい場づくりにも気を配ってほしいものです。少しの基本的配慮で、動植物は新たな環境の中で力強く回復していきます。また、子どもたちが身近で自然を体験できる場があれば、心の豊かさも増すでしょうし、我々シルバーが、水辺で安全の監視や生き物の説明など、一緒になって子供の成長を支援していきます。

昔の水辺の思い出を話し合いつつ、地元の水路の一部でも改善できるよう周囲に協力を求めています。

以上